



## 環境問題への誠実な取り組み

### 浅岡八枝子さん 堀松梅宮青少年育成委員会事務局長

プロフィール：2003年NPO法人すぎなみ環境ネットワーク(旧杉並リサイクル協会)副理事長。

法人の事業として環境学習サポーター養成講座、親子対象の自然体験や環境講座を、また、環境情報館、リサイクルひろば高井戸の区の委託講座、講演会なども企画、運営、実施に関わっている。

地域や学校で子どもの環境への目や芽を育む活動を環境学習サポーターと力を合わせて推進。地域の各種プログラムが子どもの生きる力を育むよう、学びのポイントラー制度推進。子どもの居場所づくり杉並実行委員会副委員長。区立2小学校評議員。

### ■このごみの山は何なんだ！

浅岡さんは大変チャーミングな女性である。「環境」の権威という言葉の持つイメージとはかけ離れた、自然体の魅力を持つ方だ。杉並区の環境、リサイクルを長く支援してきた彼女の活動についてお伝えしながら、浅岡さん自身の魅力について筆を尽くしてみたいと思う。

浅岡さんは、昭和63年、杉並区に引っ越してきた。以前すんでいた多摩地区は、埋立地がないため、ごみの分別が当然。行政からではなく、住人がごみを減らすために、資源ごみの分別をしていたそうだ。その意識を持ったまま、杉並に引っ越してきた当時の杉並区では、可燃と不燃の区別のみ、再利用できるものもどンドン、どンドン捨てられていた。「その地域に暮らす人として当然すべきことがされていない！」と感じたそうである。

### ■リサイクルに関わり始めたきっかけ



▲浅岡さんの授業

未ざらしの紙パックを資源に戻したい

昨今のスーパーは紙パックやトレーの回収ボックスを設置しているのが当然のようにになっているが、当時の杉並区では対応は無。全

国的に言えばちょうど、牛乳の紙パックを資源として受け入れる技術を持った製紙工場が出始め、資源化の動きが表面化してきたころ。ところが浅岡さんが入っていた生協の牛乳パックは未ざらし(漂白していないパルプを使用)のブリックタイプ。未ざらしのため再資源化が難しいと、どの工場からも受け入れを断られていた。

なぜ断られるのか。どの工場も厄介者を断る口実だけではないだろうか。原料に近い材料を使っているのだから資源として役立つなわけがないと信じ、中杉通りの消費者センターでは未ざらしの紙パックも集めて資源にできるルートを探っているという噂を耳にして、消費者団体の会合に首を突っ込んだそう。

ここでは杉並区内のスーパー各社に参加を呼びかけ、商品の包装材減量とリサイクルについて話し合いが何度ももたれていた。この集まりが原動力となり、杉並区内で有志宅がボックスステーションとして複数登録、リサイクルがすすめられた。浅岡さん宅も行きがかり上ボックスステーションとして登録。家族が飲んだ牛乳の未ざらしパックは、資源とならないにも拘らず、自宅6畳間にダンボール箱に入れられて山積されたとのことである。

紙パック回収が始まって数年は、消費者が洗浄しスーパーの回収ボックスに入れると、回収のトラックが回り、資源としての紙パック売上代金が消費者団体に寄付される仕組みが続いた。そして、時間こそかかったが、大手スーパーの積極的な協力と、世界的な資源循環型社会への転換に後押しされ、徐々にスーパー店頭で資源回収ボックスが置か

れるようになった。蛇足ながら付け足すと、未ざらしの紙パックは市場のシェアが少なく時代とともに消え、生協は軽量強度のガラス瓶を選択という顛末だったそうだ。

まだ「リサイクル」と言う言葉が人口に膾炙していないころである。浅岡さんは、杉並区の環境問題の渦中で、仲間と汗を流し静かな、しかし凛とした声を発し、平成6年に杉並リサイクル協会が設立されると、立ち上げメンバーの一人として、さらなる問題に取り組み始めた。

### ■NPO法人

#### すぎなみ環境ネットワークの歩み



▲子どもたち

平成5年、資源循環型社会の実現に向けて「都」がごみの責任を、「区」がリサイクルの責任を持つと役割分担を明確にした。杉並区では区と事業者と住民の3者が力を合わせてリサイクル問題を解決するため、「杉並リサイクル協会」が設立され、その形態は都内でも先駆けとなった。協会は、リサイクルショップの経営、講座・教室の開催、資源の集団回収などをつぎつぎと展開していったが、その後、リサイクルだけではなく、環境全般を活動に組み込もうと、平成15年4月に「NPO法人すぎなみ環境ネットワーク」として、

再出発した。

その活動については、ぜひホームページを見ていただきたい。リサイクル活動、啓蒙活動、調査、教育など多岐にわたって、消費ばかりの「環境(人と暮らし)」を何とかしようという意気込みと工夫が伝わってくる。そして、杉並区の多くの人が積極的に関わっていきこうとしている。講座には常に参加希望者が定員いっぱい、さまざまなアクティビティもいつも好評だ。「このままではいけない」と誰もが感じ始めているのだと思う。

すぎなみ環境ネットワークは、「あんさんぶる荻窪」にある環境情報館運営だけでなく、「リサイクルひろば高井戸」の運営も担当する。「リサイクルひろば高井戸」は、リサイクル協会時代から続くもの。他の区で東京都が大型家具の再利用を抽選方式で先行運営させてきた不便さを解消し、欲しい人がその場で買えるショップ方式でオープンしたのだ。「家具屋に行く前に必ず寄ってね」と浅岡さんも自慢の品揃え。さらに、その4階建てのスペースを活用して年間100本以上の講座、講演会を主催する。

1講座あたり10人以上の受講生が集まり、何より有志の講師の方々が、積極的に講座内容の提案をしてくれるという、集人力のあるコミュニティである。そしてその基本は、「区民が区民に伝える」。生活の知恵、手仕事など、区民の持っているものを生かして、区民の役に立つように活用することを理念とする。「杉並区の方は、勉強好きな方が多い」と浅岡さん、「でも、その知識や知恵を伝えていくことが少ないのでは?」と指摘する。浅岡さんにとって、家具や洋服のリサイクルだけが「環境」ではない、それらは「人、暮らし」の一環であり、知識や知恵も環境の一つであるということなのだろう。

## ■「皆、楽しんでるの?」

これだけ数々のことをこなしてきている浅岡さんに、今まで一番楽しかったことは?と伺った。「なあんでも楽しかったわよ(笑)。楽しかったことになっちゃうの、何でも(笑)。一人でいる時間も楽しいし、でも、成果を求めず、いろんな人といっしょに、というのが

人間らしいのかなあ。」と、笑顔で答える浅岡さんが言う「楽しさ」は、たんなる一過性の楽しさではない。酸いも甘いもひっくるめた包括的な人生の充実感だと思う。

そんな浅岡さんは、「皆、楽しんでる?」と疑問を持っている。そして、(自分がたくさんの人々に育ててもらった、楽しさを教えてもらったから)、皆にも楽しんでもらいたい、という気持ちで、活動を続けていると説明してくれた。NPO法人やボランティア活動には、こぶしを振るう熱演や情熱も必要なのかもしれないが、「皆に楽しんでもらいたい」という等身大の目標を持つことで、長く確実に活動を続けていくことができるのではないだろうか。

地球の環境にとって一番いいのは、人類がいなくなることかもしれない。増え続け、自己破滅に至るほど破壊し続ける人類とは、地球にとってがん細胞のようなものかもしれない、そして、「だったら、」どうすればいいんだろう。」という抱え続けてきた疑問に、浅岡さんははいともあっさりと答えてくれた。「環境は人間」だと。

私たちがよくすべき環境は、「ひと」であり「くらし」である。浅岡さんがいう環境とは、生物の生態系を現すEcology(エコロジー)ではなく、私たちの周りを取り巻く「環境Environment」。その一環として、資源のリサイクルがあり、子供たちの居場所作りがある。どれも、これも「環境問題」なのだ。

「人として当然」と訴える浅岡さんが携わってきた活動は、どれもこれも先鋭的なものが多い。他の区がやっていないこと、けれどもすべきことを実現してきている。「私はただその時、その場で関わってきただけ」と笑いながら首を振る浅岡さんだが、浅岡さんの静かな信念なしではなしえなかったことも多いだろう。また、その信念を具体的に実現している有志の方々の努力、そして、杉並区に住んでいる人たち、働いている人たちの力。地域は、行政が動かしているのではない、人が動かしているのだということではないだろうか。

(文：豊田のり子)